

# 「鏡獅子」の成立

和田 修

## (一)

新歌舞伎十八番の一つに数えられる「鏡獅子」は、本名題「春興鏡獅子」、明治23年3月10日より東京歌舞伎座で初演された長唄所作事である。九代目市川團十郎が御小姓弥生後に獅子の精を勤めた。作詞、福地桜癡。作曲、三代目杵屋正次郎。振付は團十郎自身と二代目藤間勘右衛門であった。

本曲は、江戸城お鏡曳の余興にお小姓弥生が獅子頭の前で所作事を勤めるうち、獅子の精霊がのりうつって牡丹に狂うさまをみせるという設定であるが、よく知られているように、寛保二年に初演された古い長唄「枕獅子」を改作したものである。原曲は前ジテが傾城姿の所作、後ジテは扇獅子を被り、牡丹の枝を持って石橋の所作をみせるもので、この「枕獅子」の構成は、江戸かぶき舞踊における石橋ものの嚆矢とされる長唄「相生獅子」以来の定型であるが、その背景に如何なる設定があったのかは、すでに明治にはわからなくなっていた。このような古い所作を團十郎があえてとりあげた事情については、初演時に胡蝶を勤めた、團十郎の長女市川翠扇の『鏡獅子』に詳しいので長くなるが次に引用する。

丁度私が12歳の稽古をしてをります枕獅子を、いつものやうに宅で浚つてをりますのをフツ亡父が見まして、もう一度踊つて見るといはれて、繰り返して踊りました、何んでもさうした事が幾日か続きました、その時に父が頻に頭を振つて考へてゐたと思ひましたら、それがいつの間にか『鏡獅子』になりました、その時に父から聞かされましたのは、『自分が昔習つた時はさうも考へなかつたのに、お前の稽古を見てふつと思ひ付いたので、早速福地さんに相談して、傾城を御守殿に作り替へ、筋の無い物に筋を付けて、全く生れかはそののであるが、自分の考へでは女が獅子の精にかはる、言はば白から黒にかはるやうな変化に最も興味を覚えたのであつて、それには必ずしも傾城の必要はない。そこで考へたには、傾城はどうかした場合、あらくれた挙動が無いでもないが、どこまでも女らしい、淑やかさを持つた、いひかへれば淑やかさそのものであるといふやうな概念を持つ御守殿の小姓を選べば、さうした変化はより以上に認めらるるものであらうと、考へたのに始ま

つた』といったやうな事も話されてをりました。

團十郎の意図は上記に尽くされているかと思う。すなわち、わかりやすい筋立てを与えること、傾城を御殿女中に改めること、前ジテの優美な女形の振りと対照的に、後ジテが豪放な獅子の狂いをみせることの三点である。従来「鏡獅子」のテーマとしてはこの説明が一般に行われており、たしかに現在の舞台をみるとそれが充分納得される。

しかし、團十郎や桜癡が「鏡獅子」の上演を思い立った当初から上のような明確な意図をもっていたかという点、少しく疑問が残る。初演の初日に先立って刊行された錦絵は「枕獅子」の拵えと同じであり、「歌舞伎新報」の記事からも、はじめは「枕獅子」とほとんど変わるところのないものが予定されていたように思われる。かといって翠扇の芸談や團十郎の写真をみると、初演時の舞台が今日と異っていたとも思われぬ。「鏡獅子」には初演時にかかわると思われる台本が四点残されているが、それぞれ内容に相違があり、「枕獅子」の要素を強く残すものから現行に近い形への流れをみてとることができる。團十郎が最初にどこまで構想を固めていたのかはわからないが、桜癡を含めた周囲の者が「枕獅子」に少し手を加えた程度のもを予想していたところ、初日までの短い期間に改訂が加えられて、趣きを一新した「鏡獅子」が成立したのだろうと思う。

「鏡獅子」の流行もあって、「枕獅子」本来の振りは伝えられていないやうで、振付上の比較はできないが、さいわい長唄には「枕獅子」が残されている。そこで、本稿では初演時の台本の異同の検討を中心に、長唄「枕獅子」・「鏡獅子」の比較や番付・錦絵・「歌舞伎新報」などの周辺資料を加えて、「枕獅子」に近かった当初の構想から「鏡獅子」が独立するまでの過程をたどってゆきたいと思う。

## (二)

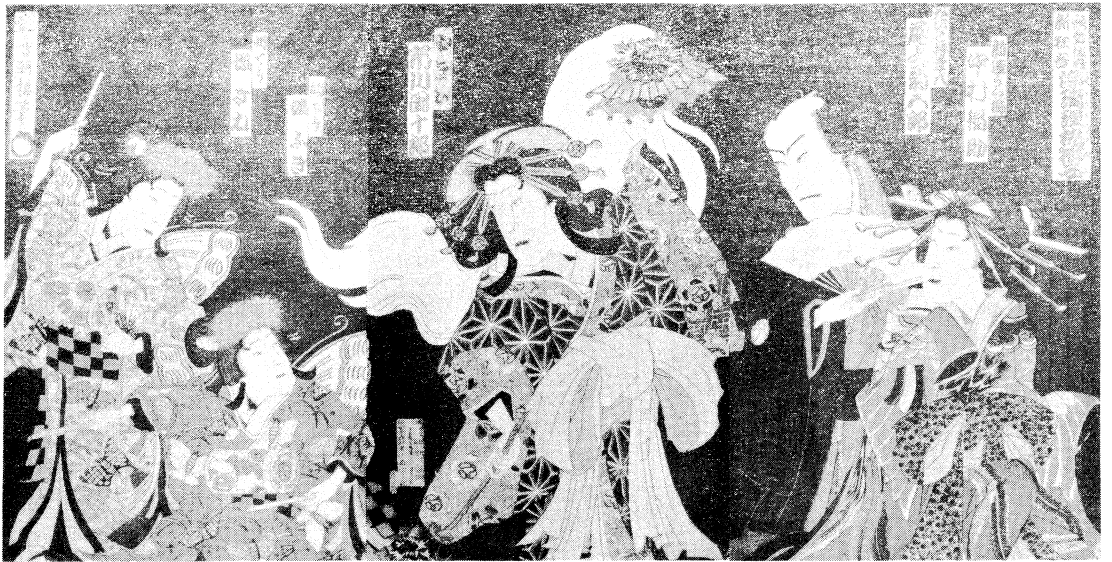
まず画証をもとにして、当初考えられていた「枕獅子」と、実際に舞台にかけられた「鏡獅子」の相違をみたい。

「鏡獅子」の錦絵としては、次の三点を知る。

- (1) 国周筆「枕獅子」(図版①)
- (2) 国政筆「浄瑠璃枕獅子」(図版②)
- (3) 国政筆「枕獅子」(図版③)



図版① 国周筆（演劇博物館蔵）



図版② 国政筆（都立中央図書館蔵）

(1)は前帯の衣裳を肌ぬぎにした後ジテの姿で、扇獅子を被り、牡丹の枝を持っている。(2)(3)は傾城姿で手獅子を持っている。さらに(2)には実際に登場しなかった菊五郎の太鼓持ちと福助の新造が描かれている。3点とも明治26年2月の刊記があって、初日前の宣伝用に作られたものであることがわかる。また、「歌舞伎新報」2月21日付1449号の表紙の絵（図版④）も、大きな牡丹の花をつけた扇獅子を被った後ジテ姿である。錦絵の製作にかかる時間を考えれば、上演が決まるとすぐに絵師にその構想が伝えられると思われる。(1)と(2)には娘2人の胡蝶が描かれているから、2人の出演が当初から決まっていたと呼び物であったことが

わかるが、団十郎の所作の方は未だ「枕獅子」と同じものとみなされていたわけである。

ところが、初日である3月10日付の絵本役割（図版⑤）・辻番付（図版⑥）には、現行の舞台と同じように、大奥での御殿女中の所作と能仕立ての獅子の精が描かれている。初日から20日後の「歌舞伎新報」3月30日付1460号の表紙（図版⑦）も御小姓姿である。また、団十郎の扮する前ジテと後ジテの写真が『鏡獅子』に掲載されている（図版⑨）が、やはり現行の拵えと変わるところがない。ただし、3月11日印刷、12日出版とした筋書の表紙（図版⑧）は、病鉢巻をした傾城姿で牡丹の枝を手にしてしているが、これは色刷りであ



図版③ 国政筆



図版④ 歌舞伎新報 (2月21日付)



中幕  
一ツ仍草  
御本筋大奥の傷  
御小姓糸生 市山園十船  
新緑の指 市山園十船  
柳枝探子 市山園十船  
日 深窓 市山園十船  
かまゆ中 市山園十船  
日用人 市山園十船  
長閑 市山園十船  
連中

図版⑤ 絵本役割 (3月10日付)



図版⑥ 辻番付 (3月10日付, 部分)

るために出版に日数がかかったと解される。逆にいえば、「枕獅子」から「鏡獅子」への変更が明らかにされたのが、初日に近い時期であったことがうかがわれる。



図版⑦ 歌舞伎新報 ( 3月30日付 )



図版⑧ 筋書 ( 3月12日出版 )



鏡獅子前ジテ 九代目市川團十郎



鏡獅子後ジテ 九代目市川團十郎

図版⑨ 『鏡獅子』より

団十郎は初演以後「鏡獅子」を2回勤めていた。2度目は赤十字の慈善興行で3日間の上演であり3度目は大阪歌舞伎座の開場記念興行で、このときに自ら演出を改めたとは考え難く、前記の写真も初演時のものとみてよいだろう。さらに初演時に父とともに舞台を勤めてこの所作事を伝えた翠扇や、その舞台を袖から見ていて、のちに翠扇に厳しく教をうけた六代目尾上菊五郎も、団十郎のおりに演じていると述べているので、初演時には現在と同じ詞章・演出であったと考えて間違いないだろう。

### (三)

次に「歌舞伎新報」の記事によって、「鏡獅子」の構想の変遷をたどってみたい。

「鏡獅子」が初演された3月の歌舞伎座の演目に関する記事が「歌舞伎新報」にはじめてのものは、明治26年2月5日付1443号で、次の如くである。

歌舞伎座次狂言は例の桜癡先生の筆にて桜田騒動を出し二番目には何か新聞ものゝよしに噂するものもあれど我が社の聞くところにてはまだ確実の場合に至らず且つ悪禪司を勤めて見たしとは梅幸丈年来の望なりと云へば一番目は多分これに極まるならんと云ふ

この段階では「鏡獅子」の名は出てこない。次の2月8日付1444号に、はじめて「中幕は団洲の『枕獅子』」とあり、2月11日付1445号に詳しい事情が記されているので、そのまま引用する。

今度団十郎丈が勤むる枕獅子の所作事は両三年前より頻りと勤められ居たるものゝよしにて一番目に桜田紀聞を出さんかとの評議ありし頃枕獅子だけは既に確定し居り幸ひ將軍家に関する狂言なれば所作事の世界も其中に込入れ大奥の女中がつれつれの慰みに芸尽しをするといふ趣向にして本来の傾城姿を御殿女中で行くことに決し居たところ其後一番目は都合によりて禪司公暁と差替になり御殿女中にては如何との説もありしが詰り奥向の女中にて勤むることとなし引抜てよりは本行の獅子にて牡丹の狂ひを見せ其間のツナギに丈の最愛の娘実子扶伎子の両女に胡蝶の狂ひを勤めさする都合なりと云ふ要するに今回の枕獅子は之れまでのものと格別変りたる所はなきも猥褻の文句など多少改めたるよしなれば従つて振事にも何程か異なりたる所を見るならんと云ふ

右には傾城を御殿女中に改めることが記され、後ジテを「本行の獅子にて」とするのは、能仕立てをさすものかと思われるが、それでも「之れまでのものと格別変りたる所はな」としている。

しかも名題が「枕獅子」となっており、「春興鏡獅子」の名題が記されるのは、2月24日付1450号が最初である。初日は3月10日だから、かなり間際になって名題が確定したことになる。

これらの記事を総合すると、「鏡獅子」の上演が決まったのは1月の終りか2月早々であったかと思われ、団十郎の胸の内如何にかかわらず、周囲は娘2人の胡蝶の所作を除けば「枕獅子」と格別変りたる所のないものとして認識していたのであり、錦絵もこの時期に予測された内容を描いたと考えられる。

### (四)

「鏡獅子」上演をとりまく周囲の状況をふまえた上で、台本によって「枕獅子」から「鏡獅子」への変化を詳しく検討してゆきたい。

初演にかかわるとされる「鏡獅子」の台本は、写本2点、活字本2点の計4点を知る。

写本2点はともに松竹大谷図書館の所蔵である。

1つは、表紙に「中幕所作事 / 春興鏡獅子」と題されたもので、『名作歌舞伎全集』第18巻の底本となっている。本稿ではかりに甲本と呼ぶ。半紙本四丁半。見返しに役名の一覧があるが、役者名は記されていない。明治26年3月6日付ほかの検閲印が捺されており、初演以来検閲用として用いられた本である。ただし、4箇所ほど誤写と思しきところがあるので、作者の自筆本を検閲用に転写したものであろう。表紙の外題と見返しの役名は本文と別筆かと思われる。

写本の第2は、表紙に「春興 / 鏡獅子」と記された本で、仮に乙本と呼ぶ。半紙本四丁。見返しに初演時の役人替名を記す。検閲印はない。本文に数箇所貼込による訂正がある。

活字本の1は初演時に博文館から出版された台本で、やはり桜癡作の一番目狂言「東鑑拜賀巻」の付録として刊行された。奥付に明治26年3月10日印刷出版とあり、「鏡獅子」の序文の日付は3月5日である。10日は歌舞伎座の初日であるから、初日の前後に出版されたものとみるべきであろう。

活字本の2は「歌舞伎新報」明治26年3月25日付1459号に掲載された台本で、冒頭に役人替名が記されている。

上記の台本の他に、長唄の正本がある。所見のものは、大正5年3月19日印刷、同年3月21日発行とした、法木徳兵衛板であるが、字体や板式からみて、初演時かそれに近い時期の正本の再板または復刻と思われる。

次にこれらの諸本の成立順序を決めるべく、先行作の「枕獅子」の詞章とあわせて、主な異同箇所を次表に示す。ただし「歌舞伎新報」本は大谷甲本と同文なので表から省いた。

表 (1)

長唄「枕獅子」正本	大谷 甲 本	博文館本	大谷 乙 本	長唄「鏡獅子」正本
<p>① 「樵歌牧笛の声、人間万事さまざまに、世を渡り行くその中に、ためし少なき川竹の、流れたつ名のうきことばかり、寄せては返す浪枕、定めなき世のなかなか、誠をあかす恋の闕、しのお枕、やひち枕、思ひぞこもる新枕、とんと二つに長枕、</p>	<p>「樵歌牧笛の声、人間万事さまざまに、世を渡り行くその中に、 花の東の宮仕へ、しのお便りも長廊下、 たれに思ひをふし柴の、こるばかりなるわが心、</p>	<p>「樵歌牧笛の声。人間万事さまざまに。世を渡り行くその中に。 花の東の宮仕へ。しのお便りも長廊下。 たれに思ひをふし柴の。こるばかりなるわが心。</p>	<p>「樵歌牧笛の声、人間万事さまざまに、世を渡り行くその中に、世の恋草をよそに見て、われは下萌え、くむ春風、 花の東の宮仕へ、しのお便りも長廊下、</p>	<p>大谷乙本に同じ</p>
<p>② 「人の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の、はたちかづらの水くさき、道理流れの身じやものと、人にうたわれ結立ての、櫛の歯にまでかけられし、平元結のゆひわけも、かゆひ所へかぬさしの、とどかぬ人にながれて、『帽子押への針の先、つくづくどうか弁の、ひざりも鶴のはしたなく、はしごくるわのわかれ坂、(傍点は大谷甲本との異同箇所)</p>	<p>「人の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の、はたちかづらの堅意地も、道理御殿の勤めじやものと、人にうたわれ結立ての、櫛の歯にまでかけられし、平元結の高わけも、かゆひ所へ平打ちの、とどかぬ人にながれて、帽子押への針の先、つくづくどうか弁の、ひざりも鶴のはしたなく、人目の関のわかれ坂、</p>	<p>「人の心の花の露。濡れにぞ濡れし鬢水の。はたちかづらの堅意地も。道理御殿の勤めじやものと。人にうたわれ結立ての。櫛の歯にまでかけられし。平元結の高わけも。かゆひ所へ平打ちの。とどかぬ人にながれて。『帽子押への針の先。つくづくどうか弁の。ひざりも鶴のはしたなく。人目の関のわかれ坂。</p>	<p>「人の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の、はたちかづらの堅意地も、道理御殿の勤めじやものと、人にうたはれ結立ての、櫛の歯にまでかけられし、平元結の高わけも、かゆひ所へ平打ちの、とどかぬ人にながれて、『帽子押への針の先、つくづくどうか弁の、ひざりも鶴のはしたなく、人目の関のわかれ坂 (『』は省略を示す符箋)</p>	<p>大谷甲本、博文館本、大谷乙本に同じ 「帽子押への～はしたなく」ナシ 「人目の関の別れ坂」は三本に同じ</p>
<p>③ ……ひんだの踊りは面白や、早乙女がござれば、苗代水や五月雨、はつの人にもなじむはお茶よ、たれが邪魔して薄茶となるならば、こちやこちやこちや知らぬ、ほんにサ、</p>	<p>……ひんだの踊りは面白や、早乙女がござれば、苗代水や五月雨、はつの人にもなじむはお茶よ、たれが邪魔して薄茶となるならば、こちやこちやこちや知らぬ、ほんにサ、</p>	<p>……ひんだの踊りは面白や、早乙女がござれば。苗代水や五月雨。はつの人にもなじむはお茶よ。たれが邪魔して薄茶となるならば。こちやこちやこちや知らぬ。ほんにサ。</p>	<p>……ひんだの踊りは面白や、早乙女がござれば、苗代水や五月雨、はつの人にもなじむはお茶よ、</p>	<p>大谷乙本に同じ</p>
<p>④ 恨みかこつも実からしんぞ、気にあたるとは、ゆめゆめ知らなんだ、見るたびたびや聞くたびに、憎てらしい程かわゆさの、起請誓紙は疑ひばらし、ヲヲよい事のよい事の、臘月夜やほととぎす</p>	<p>恨みかこつも実からしんぞ、気にあたるとは、ゆめゆめ知らなんだ、見るたびたびや聞くたびに、憎てらしい程かわゆさの、起請誓紙は疑ひばらし、ヲヲよい事のよい事の、臘月夜やほととぎす</p>	<p>恨みかこつも実からしんぞ、気にあたるとは。ゆめゆめ知らなんだ。見るたびたびや聞くたびに。憎てらしい程かわゆさの。 臘月夜やほととぎす</p>	<p>ほんにサ、恨みかこつも実からしんぞ、気にあたるとは、ゆめゆめ知らなんだ、見るたびたびや聞くたびに、憎てらしい程かわゆさの、 臘月夜やほととぎす</p>	<p>博文館本、大谷乙本に同じ(冒頭「恨みかこつもな」)</p>
<p>⑤ 「咲揃ふ(「咲乱れたる」と、風にある花の浪、風につれてつれて、顔は紅白薄紅 さいて、くどけどくどけと、丁度廿日草、君はつれなやヲヲそれそれじや、誠に花ぐるま、くるりやくるりやくるりくるりくるりくるりくるり、牡丹に戯れ獅子の曲……</p>	<p>「咲乱れたる、風にある花の浪、風につれてつれて、顔は紅白薄紅にさいて、見するは見するは、丁度廿日草、君はつれなやヲヲそれそれじや、誠に花ぐるま、くるりやくるりやくるりくるりくるりくるりくるり、牡丹に戯れ獅子の曲……</p>	<p>「咲乱れたる。風にある花の浪。風につれてつれて。顔は紅白薄紅にさいて。見するは見するは、丁度廿日草。君はつれなや、オオそれそれじや。誠に花ぐるま。くるりやくるりやくるりくるりくるりくるりくるり、牡丹に戯れ獅子の曲……</p>	<p>「咲乱れたる、風にある花の浪、風につれてつれて、顔は紅白薄紅 さいて、見するは見するは、丁度廿日草、</p>	<p>大谷乙本に同じ 「丁度廿日草」</p>
<p>⑥ ……目前の奇特あらたなり、ト此内上手にある手獅子を取つて遣ふ事よろしくあつて、さしがねのてふてふに、戯れる内に、手獅子に獅子の精霊のり移りし心になり、獅子に身体を引廻さるる振りなり、トドどろどろの鳴物にて団十郎上手へ消ゆる事よろしく、</p>	<p>……目前の奇特あらたなり、ト此内上手にある手獅子を取つて遣ふ事よろしくあつて、さしがねのてふてふに、戯れる内に、手獅子に獅子の精霊のり移りし心になり、獅子に身体を引廻さるる振りなり、トドどろどろの鳴物にて団十郎上手へ消ゆる事よろしく、</p>	<p>……目前の奇特あらたなり。(中略)弥生(団十郎)は上手八足台の上の獅子頭を帛紗ながら手に取上て手獅子にして使ふ振事あり。此時胡蝶(持笠にて)飛来る、是を見て獅子を使ふ中に獅子の精は自から獅子頭に移りて弥生は遂に獅子頭に引かれて引廻さるる振になり、ドロドロの鳴物にて向ふ</p>	<p>……目前の奇特あらたなり、ト此内上手にある手獅子をとつて遣ふ事よろしく有て、さしがねの蝶蝶に戯れる事有てトド手獅子に獅子の精霊のり移りし心になり、獅子に身体を引廻さるる振になり、トドドロドロの鳴物にて、向ふ揚幕へ弥生は入る、</p>	<p>現行では、三下りの早目の合方で花道へはいる。</p>



表 (2)

長明「枕獅子」正本	大谷 甲 本	博文館 本	大谷 乙 本	長明「鏡獅子」正本
<p>「しばらく待せ給へや、影向の時節も、今いく程によもすぎじ</p> <p>「獅子とらでんの舞楽のみきん、牡丹の英匂ひみちみち大金裏金の獅子頭、打てや囃せや牡丹ほう牡丹ほう、黄金のずるあらはれて、</p> <p>花に戯れ枝に臥しまろび、実にも上なき獅子王の勢ひ、なびかぬ草木もなき時なれや、万歳千秋と舞ひ納め、万歳千秋と舞ひ納め、獅子の座にこそ直りけれ</p>	<p>〈胡蝶〉</p> <p>…雪を運ぶかおほろげの、我も迷ふや花の蔭、</p> <p>ト比内兩人の胡蝶鞆鼓に成て早舞になる事よろしく</p> <p>「しばらく待せ給へや、影向の時節も、今いく程によもすぎじ、</p> <p>ト此時白頭の獅子にて団十郎向ふより出る、</p> <p>「獅子とらでんの舞楽のみきん、牡丹の英匂ひみちみち大金裏金の獅子頭、打てや囃せや牡丹ほう牡丹ほう、黄金のするあらはれて、頭べをうなだれ耳をふせ、花に宿かる浮世の嵐、あなたへ誘ひこなたへ寄りて、二つの胡蝶に狂ひ遊びつ、追いつあがりつ、そばへ揚羽のしほらしや面白や、花に戯れ枝に臥しまろび、実にも上なき獅子王の勢ひ、なびかぬ草木もなき時なれや、万歳千秋と舞ひ納め、獅子の座にこそ直りけれ</p> <p>ト此内二人の胡蝶を遣ひ団十郎石橋の振よろしくあつて 幕</p>	<p>揚幕の内には入る</p> <p>〈胡蝶〉</p> <p>…雪を運ぶかおほろげの。我も迷ふや花の蔭</p> <p>上の文句にて女の童（実子杖扱子）兩人は鞆鼓の振事によりて振鼓の早舞になり遂に牡丹の花の蔭に隠るゝ是より大薩摩になりて</p> <p>「それ清涼山の石橋は。人の渡せる橋ならず。法の功德におのづから。出現なしたる橋なれば。其長さ三丈余。たとへば雨の晴れたる後。虹をあらはす姿にて。向ひは文珠の浄土なり。たやすく渡り給はんは。思ひも寄らぬ御事なり。</p> <p>「しばらく待せ給へや。影向の時節も。今いく程によもあらじ</p> <p>此時白頭の獅子（団十郎）法被大口にて向ふ揚幕より出る。</p> <p>「獅子とらでんの舞楽のみきん。牡丹の英匂ひみちみち大金裏金の獅子頭、打てや囃せや牡丹ほう牡丹ほう。黄金のずるあらはれて。</p> <p>花に戯れ枝に臥しまろび。実にも上なき獅子王の勢ひ。</p> <p>石橋の振事あつて台の上に睡れば、女の童は前の粧にて出来り</p> <p>「牡丹に戯れ舞遊び</p> <p>ト台の上の獅子に戯れ掛り、獅子の睡を覚すと同時に引抜けば胡蝶の羽を染出したる姿になる</p> <p>「葉影に休む蝶の。翼かはして飛びめぐる</p> <p>「獅子は見るより勇みをなし</p> <p>此間蝶に戯る狂獅子の所作十分にありて</p> <p>「なびかぬ草木もなき時なれや。万歳千秋と舞ひ納め。獅子の座にこそ直りけれ</p> <p>また石橋の振事にて成て打上れば慢幕を下す。</p>	<p>〈胡蝶〉</p> <p>…雪を運ぶかおほろげの、我も迷ふや、花の蔭、しばし小かげに休らひぬ、</p> <p>ト比内兩人の女の童よろしく振有て左右の襖のかげには入る</p> <p>大ザツマ</p> <p>「それ清涼山の石橋は、人の渡せる橋ならず、法の功德におのづから、出現なしたる橋なれば、其長さ三丈余、たとへば雨の晴れたる後、虹をあらわす姿にて、向ひは文珠の浄土なり、たやすく渡り給はんは、思ひも寄らぬ御事なり、</p> <p>「しばらく待せ給へや。影向の時節も。今いく程によもすぎじ、</p> <p>ト此時向ふ揚幕より白頭ラの獅子好みの袴らへに出来り</p> <p>「獅子とらでんの舞楽のみきん。牡丹の英匂ひみちみち大金裏金の獅子頭。打てや囃せや牡丹ほう牡丹ほう。黄金のずるあらわられて、</p> <p>頭べをうなだれ耳をふせ、花に宿かる浮世の嵐、あなたへ誘ひこなたへ寄りて、二つの胡蝶に狂いつ遊びつ、追いつあがりつ、そばへ揚羽のしほらしや面白や、花に戯れ枝に臥しまろび、実にも上なき獅子王の勢ひ、なびかぬ草木もなき時なれや、万歳千秋と舞納め、獅子の座にこそ直りけれ</p> <p>（貼込訂正アリ）</p> <p>牡丹の花に舞遊び、</p> <p>葉影に休む蝶の、羽に翼かはして飛びめぐる、獅子は勇みてくるくるくと</p> <p>「花に戯れ枝に臥しまろび、実にも上なき獅子王の勢ひ、</p> <p>「獅子の座にこそ直りけれ</p> <p>ト右の内よきほどに、以前の女の童兩人出来り好みの衣裳引抜く事あつて、胡蝶の着付になる。此二人を遣ひ石橋の振りよろしくあつて 幕</p>	<p>大谷乙本に同じ</p> <p>（現行演出も）大谷乙本に同じ</p> <p>「橋なれば」まで、博文館本、大谷乙本に同じ以下ナシ</p> <p>各本に同じ</p> <p>ナシ</p> <p>大谷乙本に同じ（冒頭「牡丹の花に舞遊ぶ。」）</p>

初演時の詞章が現行と同じものであるという前提にたつて上の表を見ると、大谷甲本・博文館本・大谷乙本の順で成立したと考えられる。以下これについて少し細かく検討する。

①③⑤は大谷甲本と博文館本が同じで、大谷乙本はその一部を省略して長唄正本および現行と同文となっている。③は3本とも同じ詞章が記されているが、大谷乙本には省略を示すとみられる付箋がついていて、この部分を抜くと正本・現行と同じになる。

④は大谷甲本のみが「枕獅子」と同文で、博文館本・大谷乙本・正本・現行は、同じ箇所にかットがある。

⑧⑨の後ジテ部分は各本の異同が大きい。博文館本の段階で「枕獅子」にはみられない独自の詞章となっており、大谷乙本は大谷甲本と同じ詞章の上に貼込訂正をしているが、訂正された詞章は博文館本より正本・現行に近い。

これらの点からみて、大谷甲本が最も早く成立し、博文館本・大谷乙本の順に改訂が加えられ、長唄正本が初演時の最後の段階の詞章を伝えるものとみられる。大谷甲本の検閲印は3月6日付、博文館本の刊記は3月10日であり、検閲や出版にかかる日数は不明ながら、一応上の推定に矛盾しない。大谷乙本には貼込があるから、稽古の段階で訂正が加えられた本であろう。

なお表に省いた「歌舞伎新報」本は初日がいってから出版されたことが明確な唯一の本であるが、先に述べたように大谷甲本と同文である。「歌舞伎新報」本に誤植とみられる箇所が6箇所ある一方、大谷甲本の誤写は改められているので、直接大谷甲本に拠ったという確証はないが、ひとまず検閲本である大谷甲本またはその原本を活字化したとみてよいと思われる<sup>16</sup>、以後とくに「歌舞伎新報」本については問題にしない。

## (五)

以下、主な異同箇所をとりあげてその意味を考えてみたい。

全体の設定はすでに大谷甲本の段階で確定している。すなわち、「枕獅子」が廓を舞台にした遊女の所作であったのを、江戸城の「御本丸大奥の体」に改めたのである。冒頭に引いた翠扇の談話によれば、後ジテの獅子と対照的な女性の象徴として御小姓を選んだといい、またふつうには高尚癖のある団十郎が傾城姿を嫌ったものともいわれているが、前掲の「歌舞伎新報」2月11日付1445号によると、一番目狂言とのかかわりで大奥が選ばれたという事情もあったようである。江戸時代には將軍家のことを脚色することは禁じられており、鏡山でも田舎源氏でも、別の世界に仮託して

それとなく大奥を暗示していたのであるから、正面きって江戸城の御本丸を舞台とした本曲は、まさに明治の所作事であったといえよう。

なお、大谷甲本には前ジテの役名に関して貼込が3箇所あり、奥女中→御小姓弥生、お女中頭の村越→お小姓の弥生、村越→弥生と訂正している。この村越という役名は一番目狂言に予定されていた桜田騒動にかかわるものかとも思われるが未詳。奥女中は大奥に勤める女性一般の称であり、これを御小姓と限定することで可憐さを強調したのであろうか。

また、表には掲げなかったが、幕明きの鳴物が大谷甲本・博文館本では「静かなる祇園囃子」で、大谷乙本もはじめ同じように記してあったのを、貼込によって「調べ」に改めている<sup>17</sup>。はじめの「祇園囃子」はお鏡曳の曳き物につき、「調べ」は大奥という場面について用いられるものであろう。お鏡曳の賑やかさを想定していたものが武家屋敷の堅い感じに改められたのは、やはり団十郎の意図であったかとも思われる。

用人たちのセリフにも若干異同があるが、これは省略して詞章の検討に入ろう。ふつう上の巻と呼ばれる前半のお小姓の所作の詞章は、「枕獅子」の詞章を換骨奪胎して遊里気分の濃厚なところを高尚化したものといわれている<sup>18</sup>。この点に気をつけながら、まず上の巻の詞章をみてゆきたい(校異表参照)。

①冒頭部は大谷甲本の段階で「枕獅子」の曲名の由来となった枕づくしをすっかり省いているのは、枕が廓の情事を思わせるための処置であろう。大谷甲本で新たに創作された「たれに思ひをふし柴の」云々は『千載集』の歌をとり入れた桜癡苦心の作だったと思うが、大谷乙本で省かれ、別に「世の恋草」の詞章が挿入されている。理由ははっきりしないが、「世の恋草」から「春風に」までの増補部分は「枕獅子」の旋律をそのまま利用しているので、作曲上の都合であったのかもしれない。

②③④は廓情緒の強いことばを順次省略してゆく過程がみられる。大谷甲本がほとんど「枕獅子」の詞章のままで、若干文句を改めている程度であるのは、作者桜癡自身が最初は「枕獅子」を離れることを意識していなかったであろう。博文館本で④の「起請誓紙」は省かれたが、その他は大谷甲本と同じで、大谷乙本になってはじめて穩当を欠くような字句を含む一節を省略している。それにしても、よく言われるほど高尚な文句に改められているわけではないように思う。

これまでの改訂箇所は、①で「花の東の宮仕へ」の二句に新たな旋律を加えたほかは、詞章の削除にとまってその部分の旋律もカットするだけであった。これに対して⑤の「咲乱れたる」の部分



は、大谷乙本で「枕獅子」以来の「君はつれなや」から「くるりくるり」が省かれただけでなく、作曲も全面的に改められている。

「枕獅子」のこの部分は前段から引き続いて三下りであるが、「鏡獅子」は「咲乱れたる」の唄の前に打ち合わせの合方を挿み、この中で三下りから本調子、さらに二上りへと技巧的な転調を行い、「咲乱れたる」から「廿日草」までも、詞章は「枕獅子」によりながら旋律は独自であって、作曲者三代目正治郎好みの高調子で派手な節付となっている。そして「廿日草」が切れるとそのまま「枕獅子」の手に戻って、唄の途中で三下りに転じている。

この部分の振りは現行では二枚扇である。「枕獅子」本来の振りは不明ながら、おそらくもともとあったものではないだろう。団十郎は自ら振付けた「紅葉狩」にも二枚扇の振りを取り入れており、伊原青々園の『市川団十郎』に、幼時暗やみの中で右の手から左の手へ扇を投げてとる練習をしたという逸話が記されているから、得意の芸であって、好んで使ったのだらうと思う。

「廿日草」の唄で扇を左右に開いてキマルと、再び「枕獅子」の合の手に戻って扇を1本捨て、「牡丹に戯れ」以下の石橋を見渡す所作になる。「君はつれなや」云々の詞章は内容上とくに問題があるとも思われないので、これを省いたのは作曲や振付の段取りの都合であったかとも思われる。

⑥に示したように、「目前の奇特あらたなり」の唄が切れると三下りの「楽の合方」になり、上手に飾ってあった獅子頭をとる。これに獅子の精霊がやどり、引きずられるようにして「早目の合方」で花道へ入るのが上の巻の終りである。「楽の合方」は「枕獅子」にもあるが、ここで獅子頭に精がやどるところを説明的な所作ではっきり見せるのは、江戸城大奥の鏡曳きの余興という冒頭の設定と対応して、団十郎が言うところの「筋の無いものに筋をつけ」た新たな作意であろう。

そしてこの部分の振付は団十郎の苦心が伝えられるところでもある。獅子頭が自分の意志と離れて後見が遣う蝶に狂いかかるのを押えようとして押えかねるところでは、右手と左手で別々の気持ちを表現し、引込みの際に獅子頭に引かれまいとして後ろへ体を戻すときも、獅子頭をもった右手は前へ進もうとするさまをみせるなど、困難な技巧が凝らされ、二枚扇から引込みまでが上の巻のヤマ場であると同時に、全体を通じての頂点ともなっている。

(六)

間狂言の格の「胡蝶」は、団十郎の2人の娘、実子(のちの翠扇)・扶伎子(のちの市川旭梅)

の2人のために福地桜癡が新たに書き下ろし、藤間勘右衛門が振りをつけたものである。団十郎には女優養成の志があり、すでに明治23年の慈善興行で2人の娘を踊らせているが、本興行でかぶきに女優が出演したのはこの時が最初であり、「鏡獅子」上演の呼び物の一つであった。

その構想は「歌舞伎新報」2月17日付144号の表紙(図版⑩)をみると、舞楽の「胡蝶」を強く意識したものであったことがよくわかる。詞章の上でも『松の葉』巻二の長歌「花の宴」の前半をとっており、擬古典趣味の作である。大谷甲本の段階で長唄正本・現行と同じ詞章になっており、当初から構想が固まっていた動かなかったことが知られる。

図版⑩



(七)

「胡蝶」の所作が終わると、後ジテの石橋の所作になる(ふつうこの2つをあわせて下の巻と呼ぶ)。しばしば指摘されているように、「枕獅子」をはじめとする女形の石橋ものの後ジテは、前ジテの衣裳を肌ぬぎにして扇獅子を被っただけの拵えであったのに対し、「鏡獅子」は前ジテを女形、後ジテを能仕立ての石橋としたところに団十郎の創意があった。父親の七代目団十郎は「閻茲姿八景」で能仕立ての石橋を勤め、9代目自身もすでに明治11年の「新石橋」等で能仕立てを演じている

から、「鏡獅子」の後ジテを能仕立てとすることが早くから団十郎の腹案にあったとしても不思議はない。

すでに博文館本に「法被大口にて」と能装束が明記されているが、大谷甲本は「白頭の獅子にて」とするのみで、能仕立てと女形糸の獅子のいずれを予定していたのか、これだけでははっきりしない。錦絵が前ジテを傾城姿、後ジテを扇獅子の女形で描くのに対し、前掲の「歌舞伎新報」2月11日付の記事には御殿女中と「本行の獅子」を演ずることが記されているので、前ジテが御殿女中である大谷甲本は、後ジテを能仕立てと想定しつつ、とくにト書には断然なかったものであろう。

大谷甲本では「胡蝶」に引き続いてすぐに獅子の出となるが、博文館本以下では獅子の出の前に⑧の大薩摩が挿入されている。これは「胡蝶」までの女性的なイメージを一転して、荘重な獅子の出を導く序曲としての役割を果たすとみることができる。これに関連して前段の胡蝶の扱いも問題になる。現行では胡蝶は所作が終わると上下へ別れて入り、獅子の出のあと再び登場する。大谷乙本には⑦に示したように「左右の襖のかげには入る」と明記されており、博文館本でも「牡丹の花の蔭に隠る」とあるが、大谷甲本には何も記されていない。大薩摩なしにすぐ獅子の出となることを考えあわせると、おそらく舞台後方に控えたままで獅子の出を待つことが予定されていたのではないかと思われ、この点から見ても、大谷甲本は博文館本以下と比べて、前ジテと後ジテの対比に充分意を用いていないように思われる。

獅子の出は、現行では「乱序」の鳴物で、本舞台にくると「獅子舞五段の合方」で一寸狂いを見せる。各本ともト書に何の指定もないが、「連獅子」などの先行作も同じ形式なので、とくに記す必要がなかったのであろう。

獅子舞の合方に続いて⑨の唄で石橋の所作にかかる。この詞章は大谷甲本をみると大部分を「枕獅子」に拠っている。石橋の所作の詞章は、「相生獅子」以来、明治に入って能仕立てで作られた「連獅子」や「新石橋」に至るまで、謡曲「石橋」の末尾の詞章をとり入れたものがほとんどで、大谷甲本もそれを受けついでいるわけである。ただし⑩「頭べをうなだれ」から「面白や」までは新たに挿入されたもので、「執着獅子」の前ジテの所作の一節に多少手を加えて使っている。これはト書に記されているように、2人の胡蝶がからむのに合わせて、詞章の上でも変化をもたせたのだと思われる。

とはいえ、大体において従来とかわらない大谷甲本の詞章から予想される作曲・振付には、これまでの類型を出る大きな変化を期待できないが、博文館本以降の改訂によって、詞章・旋律・振り

とも独自の工夫が生まれた。

博文館は、大谷甲本の⑩「頭べをうなだれ」から「面白や」までをそっくり抜き、かわって「牡丹に戯れ舞遊び」から「勇みをなし」までを新たに補った。これは長唄「狂獅子」からとり入れたものである。

大谷乙本は、はじめ大谷甲本と同じ詞章を写しているが、この上に貼込がなされていて、博文館本と同様に「黄金のずる」のあとを訂正している。文句は大体博文館本と同じであるが、順序の入れかえがあって正本に近くなっているのは、作曲や振付の手順の問題であろう。

大谷乙本までは石橋ものにつきものの「獅子とらでんの舞楽のみきん」云々の詞章があって、その後半に新工夫を加えていたのであるが、正本・現行では従来の詞章を全て省き、大谷乙本の貼込に記された詞章のみが残された。つまり「狂獅子」からとり入れた詞章が残されたことになる。

「狂獅子」は宝暦・明和の頃、鳥羽屋三右衛門が作曲したと伝えられ、「三畜」の1つとして秘曲の扱いをうけている。「鏡獅子」にとり入れられた部分は一下りという変り調子を用いており、「鏡獅子」も一下りを踏襲し、旋律もかなり応用している<sup>26</sup>。その結果、唄の量が減り、技巧的な合方で多くを表現しようとする象徴的な曲となった。

振付の面では、獅子の精が眠っているところを胡蝶が起こし、それより胡蝶を相手に勇壮な狂いを見せる。後ジテの所作にも静と動の対比がはっきりとつけられているところに、団十郎の意図をみることができる。眠っている獅子を蝶が起こすのは、常磐津「勢獅子」などにとり入れられている太神楽の獅子舞にもみられる所作である。また、子役が胡蝶に扮して獅子にからむのは、間狂言の「胡蝶」が娘2人だけの所作なので、後ジテで父子が共演するところに主眼があったのであろうが、従来の石橋もので獅子にからむのは、後見の違う差し金の蝶がふつうであるから、これも新しい趣向といえよう。

先にも述べたように、後ジテの拵えが能仕立てであるのが「鏡獅子」のポイントの1つであるが、同じく能仕立ての「連獅子」が従来の石橋ものの型どおり牡丹の技をもつだけで、とくに目立った所作をみせないのに対し、「鏡獅子」の後ジテは振付の上でも作曲の上でも勇壮と優美を兼ねそなえた、明治という新しい時代にふさわしい石橋の所作であるといえよう。

こうした後ジテの演出は、博文館本の段階で現行と同じ段取りがト書に記されており、「狂獅子」の詞・曲の導入とともに、早い段階で確定していたことがわかる。大谷乙本まで残されていた「獅子とらでん」の常套句が長唄正本で省かれているのも、新しい演出を徹底させるためであったと考

えられる。

(九)

改めて各台本の性格を整理してみると、大谷甲本は、前ジテはほとんど「枕獅子」のまま、後ジテも従来の型を襲っていてあまり新工夫がみられない。博文館本は、前ジテは大谷甲本と大きく変わるところがなく、後ジテは「狂獅子」をとり入れて新しい演出を明確にしている。大谷乙本の後ジテは博文館本とほぼ同じであるが、前ジテにもカットを施して御殿女中の趣意を一貫させ、現行の「鏡獅子」と若干の相違をのぞいて一致している。

最後に各台本の成立時期を「歌舞伎新報」の記事などから推定してみたい。

まず、団十郎が「鏡獅子」の上演を思い立った時期であるが、冒頭に引いた翠扇の談話では、翠扇が12才の年に「枕獅子」の稽古をしているのを見たのがきっかけとされている。ところが前掲の「歌舞伎新報」の2月11日付1445号では「両3年前より頻りと勧められ居たるもの」とされている。同じく2月17日付1447号にも次のように記されている。

同文の枕獅子を勤めんとするに至りたるは別に仔細のあるではなく時は昨年のはじめなりしとかかねがね勧められ居るよしを桜癡居士に咄し且つ枕獅子の振事はあらゆる所作の中最も古風にして近来出来星のものとは格段の相違あるよしを語りたる所其後連りに居士より勧誘し遂に此弥生狂言に出すこととなしたるなりと

ここにいう昨年の春は明治25年、丁度翠扇の12才に当るから、「歌舞伎新報」と翠扇の談話は、ともに事実の一面を伝えるものとみることができる。すなわち、前々から「枕獅子」を勧められるようなこともあったのであろうが、自分で舞台にかけることを考えたのは、娘の踊りをみたのがきっかけで、その後桜癡に相談をもちかけたのであろう。

大谷甲本の成立時期は、先述のように、傾城姿の錦絵と、御殿女中と本行の獅子の組合せが記された「歌舞伎新報」2月11日付1445号との中間に求めることとなる。上演決定後しばらくして書かれたことになる。もっとも絵師がどこまで正しい情報を得ていたのかという疑問は残るので、団十郎と桜癡が傾城を御殿女中に改めることを決めた時期は今のところ確定することができない。

「歌舞伎新報」2月24日付1450号には、はじめて本名題が記され、「歌舞伎座は昨日より本誌に取掛りたるが」としている。貼込のある大谷乙本は稽古場で訂正されていた可能性が強いから、

第一次の成立は本読みの前後で、初日直前まで手が加えられたかもしれない。博文館本は大谷甲本と大谷乙本の中間に位置し、後ジテに改訂が加えられているから、どちらかといえば乙本に近い時期に成立して印刷に廻されたものとみることができらう。

こうして、短期間のうちに改訂が施されて「枕獅子」は「鏡獅子」として明治によみがえることになった。大谷乙本もなお現行と相違があることを考えると、「鏡獅子」の成立はまさにその初日であったかもしれない。

団十郎は「団洲百話」で、

踊にて近来尤も苦しかりしは鏡獅子なりき、  
(中略)鏡獅子に至りては前に女にて身体を苦しめられ直ぐ反対のものとなる事ゆゑ、その苦しさ云はん方なし、殊に其の踊は極昔風にて刻銘なる手多ければこすい事は能ず、年を老ては中々に骨が折れるなり。

と述べている。「鏡獅子」の前ジテには「枕獅子」の振りがかなり応用されているかと思われ、両者を比較研究することができないのは残念である。また、「鏡獅子」が他の石橋ものに与えた影響も大きく、これについては機会を改めて考えてゆきたい。

- 注(1) 『続統歌舞伎年代記』は3月12日初日とする。これは筋書の日付によったものと思われる。いま絵本役割・辻番付・「歌舞伎新報」1454号により10日初日とする。「歌舞伎新報」1464号・1465号によれば、4月11日まで33日間興行した。
- (2) 中村兎太郎（五代目福助）の「鏡獅子の大役」（『演芸画報』大正4年11月号）によると、勘右衛門が振付をしたものに、さらに団十郎が工夫を加えたという。
- (3) 初演時の外題は「英獅子乱曲」で、後に「枕獅子」に改題されたとみられている（近世邦楽年表）。かぶきでの再演記録は見当たらない。
- (4) 昭和23年7月30日、芸仲堂出版部刊。翠扇の口述した芸談「鏡獅子」を中心に関係者の芸談などを収録したもので、市川三升編纂、川尻清潭校閲。
- (5) 『演劇百科大事典』・『名作歌舞伎全集』第十八巻本曲解説など。
- (6) 「歌舞伎新報」3月10日付1454号に「一昨日より番付の配付をなせり」とある。これは絵本役割をさすものかと思う。
- (7) 明治29年6月7日より歌舞伎座にて興行。伊原青々園『市川団十郎の代々』は三日間、『続統歌舞伎年代記』は一週間とする。
- (8) 明治31年2月15日より。この時の番付には胡蝶の役名がないので、この点では手直しがあったかもしれない。しかし、逆に翠扇はこの舞台を見ていないと考えられるので、このときの演出が定型として後に伝わったとは思われない。
- (9) とともに『鏡獅子』所収の翠扇の芸談と、菊五郎の「鏡獅子の思ひ出」による。
- (10) 幕明きの侍と腰元の役名とそのセリフ、胡蝶の拵えと振りなど、細部には変更もあるが、弥生と獅子の振りの根幹は初演時に確定したとみられる。
- (11) 『名作歌舞伎全集』第十八巻に底本を演劇博物館所蔵本とするのは誤記かと思われる。
- (12) 大谷凶書館の目録カードでは本書を「作者自筆原本」としているが、演劇博物館所蔵の福地桜癡自筆台本『太閤軍記朝鮮巻』『双面忠義鑑』と比して別筆とみられる。本書は狂言作者風の書体であり、この時歌舞伎座には河竹新七ほかの作者が出動しているので、狂言作者が清書して提出したのであろう。
- (13) 演劇博物館所蔵、六合新三郎旧蔵本。
- (14) 初演時の正本未見のため、後世の再刻本である沢村屋利兵衛板による。
- (15) 東大国文学研究室にも『春興鏡獅子』の台本が所蔵されている。表紙に当ル丑の菊月狂言、裏表紙に明治卅四年九月吉日、本主簿磨屋と記されており、34年10月15日より新富座で、子供芝居の初代中村又五郎が上演したときのものであるが、内容は大谷甲本と同じである（現行にない詞章は「」でくくって省略を示している）。大谷甲本にある明治34年10月14日付の検閲印はこの時のもので、検閲本である大谷甲本を転写したことが明らかである。
- (16) 大奥のお小姓の職制については、三田村鳶魚「御殿女中の研究」（『三田村鳶魚全集』第三巻）に詳しい。7歳ぐらいからお小姓になり、12、13歳で元服、16、17歳まで勤める。元服すれば眉をおとし、振袖も着ないので、団十郎の「鏡獅子」が実情を反映していないと指摘している。
- (17) 現行では「調べ」入りの「忘れ貝合方」。
- (18) お鏡曳は、永島今四郎・太田贅雄の『千代田城大奥』、鳶魚の「御殿女中の研究」によると、正月七日に献上された鏡餅を下男たちが鳴物で囃して曳く行事である。お小姓などは参加しないので、この点でも鳶魚は「鏡獅子」の設定の誤りを批判している。
- (19) 浅川玉兎『長唄名曲要説』など。
- (20) 翠扇「鏡獅子」・五代目福助「鏡獅子の大役」などによる。
- (21) 実子は3月26日まで出勤したが、歯痛のため以降は篆刻家益田香煙の娘荔枝が代って勤めたと「歌舞伎新報」3月30日付1460号にみえる。
- (22) 『団洲百話』『市川団十郎の代々』などによる。
- (23) 明治23年7月7、8両日新富座において三升会の慈善興行として「藤娘」「松風」を踊った。
- (24) 「歌舞伎新報」1452号、1455号、1462号などに記事がある。
- (25) 翠扇の「鏡獅子」によると、初演時の胡蝶の拵えは団十郎の意匠にかかるもので、髪は唐鬘風に結っており、現行より舞楽に近いイメージであったと思われる。「胡蝶」の所作事は「鏡獅子」以前にも変化舞踊の一コマとして上演されており、舞楽の装束を思わせる絵が絵本番付・正本絵表紙・錦絵などに描かれているものもある。天保7年3月中村座の五変化「席書扇絵合」の「地主の桜に舞の胡蝶」はその顕著な例であるが、初代岩井紫若の一人の所作であり、その他の曲も一人立ちか雌雄番いである。「鏡獅子」は子役二人の連れ舞である点で、童舞の「胡蝶」に一層近いものとなっている。なお、丸茂祐佳「娘のおどりのテクニック②〈長唄・鏡獅子—胡蝶—〉」（『舞踊研究』46号）に、柳亭種彦の合巻『修紫田舎源氏』の挿絵との類似が指摘されている。
- (26) 「狂獅子」は三代目杵屋勘五郎が伝えており、正治郎が「鏡獅子」の作曲にあたって、勘五郎の子の六代目三郎助に教えを乞うた逸話が『長唄浄観』に記されている。
- (27) 現行の後ジテの演出には六代目菊五郎の工夫が加えられていると考えられる（菊五郎「鏡獅子の思ひ出」）が、今日これを識別するのは困難である。
- (28) 「鏡獅子」の合の手に「勢獅子」の合の手の一節がとり入れられている。